

箱根の昆虫

かるべはるき
荻部治紀 (学芸員)

「ハコネ」の名前が付く昆虫

箱根は首都圏から比較的近い山地で温泉にも恵まれており、古くから著名な観光地として、開国前後に外国人の調査が頻繁に行われた地域でもありました。そのために、箱根で得られた標本をもとに新種として発表された種が沢山あります。とくに甲虫類にその例が多く、今では県下から絶滅したと考えられているアカガネオサムシも、箱根塔ノ沢がタイプ産地（基準産地）になっています。アカガネオサムシは、湿地に生息する種ですので、今では想像もつきませんが、当時の塔ノ沢には湿地環境があったのでしょうか？やはり水生昆虫であるセスジガムシも宮ノ下での原記載1例の記録しかない種です。このような新種発見の過程で、学名や和名に「ハコネ」の名前が付けられた種もあります。

和名でみると、ハコネアシナガコガネ（図1）、ハコネチビツツハムシ、ハコネメクラチビゴムシ、ハコネキジラミ、ハコネクスジオオキノコ、ハコネホソハナカミキリ、ハコネナガレトビケラ、ハコネハバチ……数えてみると、29種もありました。昆虫学の歴史の上からも、箱根は由緒正しい場所ということが出来ます。

草原、湿原環境がキーワード

一方で、箱根は丹沢山地と異なり、「草原」や「湿原」に恵まれた地域でもありました。台ヶ岳の裾に広がる仙石原から湖尻一帯、外輪山の山頂部には、チョウの記録から見ると自然の草原から茅場としての草原まで、さまざまな草地環境が存在したようです。そのため、このような環境にだけ生息する種が沢山記録されています。残念ながら草原環境の



図1 「ハコネ」の名のつく昆虫「ハコネアシナガコガネ」。高桑正敏氏撮影。

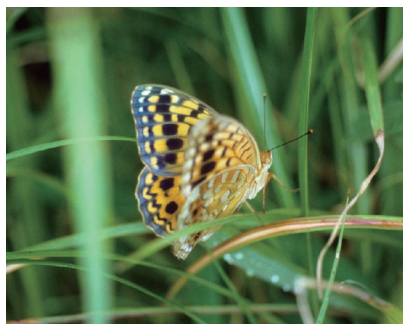


図2 箱根では絶滅したオオウラギンヒョウモン（写真は山口県で撮影）。

劣化や湿地の乾燥化、またこうした環境は開発されやすいこともあって、箱根を特徴づける多くの種は絶滅してしまっています。

草原のチョウとしては、オオウラギンヒョウモン（図2）、ヒメシジミ、ゴマシジミ、クロシジミなどが代表種ですが、ほとんどは1960年代までに絶滅してしまっています。

甲虫類で現存しているものとして貴重なのは、オオルリハムシ（シロネの仲間を食べる）で、体長1センチちょっとのかなり大型の赤い金属光沢のあるハムシです（図3）。湿地環境の悪化で全国的に数を減らしており、仙石原が県内唯一の産地になっています。初夏のころ、シロネ類の葉上や周囲のヨシの葉の上で静止する個体を見かけることが多いです。クロヘリウスチャハムシというハムシは、ゴマギを食べる小型種ですが、全国的にも発生地は他にほとんど知られていません。仙石原の2本の木で発生しています。ハムシの仲間は草原でだけ見られる種も多く、ヒラタネクイハムシ、ヒウラアシナガハムシ、クスジツツハムシ、ジュウシホシツツハムシ、オオサルハムシなども県内では箱根のみで記録されて



図3 箱根を代表する昆虫のひとつオオルリハムシ。仙石原の湿原地帯で見られる。高桑正敏氏撮影。



図4 芦ノ湖で見られる「流水性」の種のひとつホンサナエ。

いる種です。上記の種の中でも半数近くが最近の記録がなくなっています。このほかの甲虫類では、ハガクビナガゴムシ、ケスジドロムシなども県内で仙石原でしか記録がありません。

ルリボシヤンマやモートンイトトンボ、ヒメアカネなどの湿地性のトンボが多いことも、箱根の昆虫相の特徴でしたが、最近はやはり湿地の乾燥化により、かなり数を減らしています。なお、仙石原の湧水流では、普通春のトンボであるカワトンボ類（箱根ではアサヒナカワトンボにあたる）が、4月から10月まで長期間見られることも興味深いです。

止水なのに流水？芦ノ湖のトンボ

芦ノ湖には、普通河川中流域に生息するはずの種が見られる特徴があります。湖は止水に分類されますが、大きな湖は常に波が立つために、トンボからみると流水環境と同じなのでしょうか。ホンサナエ（図4）、アオサナエ、コオニヤンマ、オジロサナエ、コヤマトンボなどが代表的で、これらは、砕波湖岸性の種という呼び方もあります。富士五湖や琵琶湖などでも同様の種を見ることが出来ます。

このように、箱根は県内でも非常に特徴的で、この地域にしか生息しない種が多い貴重な地域だったわけですが、草原・湿地性の種は、残念ながらその多くが絶滅しており、また残された種も危機的状況です。仙石原の湿原では、最近さらに乾燥化が進行しているようです。箱根は開発と保全という古くからの課題が集約された場でもあります。少なくとも現在まで生き延びてくれた種は、なんとか後世に引き継いでいきたいものです。